

O-2-4-9

埋入深度を深められない顎骨形態におけるティッシュレベルインプラントの提案

○岡 吉孝¹⁾, 奥寺 俊允¹⁾, 橋口 華人¹⁾, 安齋 聡¹⁾, 佐藤 宏美¹⁾, 安齋 崇²⁾, 洪 性文³⁾¹⁾東京形成歯科研究会, ²⁾順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学講座, ³⁾日本インプラント臨床研究会

Proposal of tissue-level implants In the jawbone form that cannot deepen the depth of implant

○OKA Y¹⁾, OKUDERA T¹⁾, HASHIGUCHI H¹⁾, ANZAI S¹⁾, SATO H¹⁾, ANZAI T²⁾, HONG S³⁾¹⁾Tokyo Plastic Dental Society, ²⁾Department of Otorhinolaryngology Juntendo University Faculty of Medicine, ³⁾Clinical Implant Society of Japan

I 目的: ティッシュレベルインプラントの埋入位置や深度の理論は既に確立している。ボーンレベルインプラントでは、埋入深度が浅くなると骨縁とインプラントアバットメントジャンクションが近くなり適正な骨縁上組織付着が得られないのでマージナルボーンロスが起きるとされている。一方ティッシュレベルインプラントでは粘膜の厚みとは関係なく骨縁埋入しても骨吸収が起こりづらい。ただし骨縁下に埋入すると辺縁骨吸収が大きくなる。これは研磨表面がアバットメント様に付随し、マイクロギャップを骨頂から遠ざけるインプラントデザインに起因している。今回、ティッシュレベルインプラントを用いることによって外科的侵襲を減らすことができた2症例を報告する。第1症例は、上顎大臼歯部において残存骨高径が3~4mmの骨形態に対してティッシュレベルインプラントを骨縁埋入した。第2症例では、下顎大臼歯部において舌側のコンケイブ形態が強い骨形態に対してティッシュレベルインプラントを骨縁埋入した。現在までに良好な経過を経ている。本発表において、これまでの治療経過について報告する。

II 症例の概要: 症例1, 患者は29歳男性で#16部の欠損補綴を主訴に来院。既往歴に特記事項はなし。欠損部にインプラント治療を希望され患者の同意を得たので、歯周基本治療後にインプラント埋入を行った。上顎洞底形態や残存骨高径を考慮してティッシュレベルインプラントの埋入を行った。症例2, 患者は66歳女性で#36部の破折している歯根の疼痛を主訴に来院。既往歴に特記事項はなし。欠損部にインプラント治療を希望され患者の同意を得た。歯周基本治療後で抜歯から2か月後に下顎骨形態を考慮してティッシュレベルインプラントの埋入を行った。

III 考察および結論: 現在2症例共にインプラント周囲に炎症所見は認めず、パノラマエックス線所見においてもインプラント周囲の骨吸収像もなく良好な経過を示している。ティッシュレベルインプラントを用いることによってボーンレベルインプラントと比較するとアバットメントのジョイント部分が骨縁上にくるので辺縁骨吸収のリスクを回避できる。顎骨の形態によっては、ボーンレベルインプラントと比較して埋入深度を若干浅くすることができるのもメリットの1つである。(治療はインフォームドコンセントを得て実施。発表についても患者の同意を得た。)